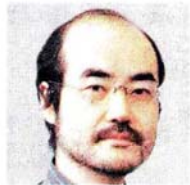


思考に適した検索サイトとは

# 文章で入力連想で抽出

## 潜在記憶と電子情報を連結

高野 明彦



国立情報学研究所教授  
(連想の情報学)

どんな検索語にも瞬時に数十万ヒットを返すウェブ検索は、まるで魔法の杖だ。世界中の百億ページを網羅していると聞くと、自分が求める情報はすべてそこにあると思わされる。確かに単純な調べものには便利で、検索のコツを掴むと外部脳とさえ感じられる。私たちはこうしてGoogleを自在に使いこなして自由な意思決定に役立てていると思ひ込んでいるが、それが本当かどうかはかなり怪しい。

### 知の公共財として活用

指定した言葉の有無だけで探すウェブ検索は超強力なサーチライトのようなもので、地球の裏側まで見通せるが、その視野はひどく狭い。数語を指定して集めたページが関連する全知識の縮図だと錯覚しがちだが、実際はひどく偏った情報である。

そんな検索結果から役立つ情報をコピー&ペーストすれば、自分の意図に合う情報を簡単に収集できる。私たちはこの単純

な検索作業を、自分の頭で考えることと混同しがちである。

「ウェブ2.0」という流行語に乗って発信されるページはそんな「自分の考え」で溢れかえることになる。偏った情報に基づく論評がウェブ上で増殖する

原因はここにある。では、思考するのに適した電子情報空間とはどんなものか。

私たちは誕生以来の記憶を恐らくはずっと潜在意識下で持ち続けながら、普段はほんの一部だけを思い出して使っている。つ



まり、自分の脳内の記憶を連想的に探索し、無意識下で関連情報を想起しながら思考すると考えられている。一方、情報空間には、決して眺め尽くせない大量の情報が存在し、そこから思考に役立つ情報を収集して活用することが求められている。考えてみればこの電子情報は私たちの潜在記憶に似ていないか。

このような観点から、我々は「連想の情報学」を提唱してきた。大量の電子情報のプールから、求めている情報と内容的に近いものをさっくりと探し、その概要を人間の連想を刺激する形で提示する。それを見た私たちの頭の中では関連する記憶が無意識に呼び起こされ、それが次なる電子情報空間との対話のきっかけになる。我々の頭の中に眠る膨大だが意識的にはなかなか活用できない潜在記憶と、確かに存在しているが一度も見ることのない大量の電子情報を「連想」によって結びつけようという試みである。

住みやすい街に道路や公園が欠かせないように、電子情報空間にも有用で高信頼な公共コンテンツが必要である。この「知の公共財」を社会全体としてきちんと維持して広く活用することが、その文化の底力となる。長い年月と多大な努力により維持されてきた高信頼なコンテンツは情報空間における「水源」の役割を果たすと期待される。

見えから方向を判断  
このような信念から、我々は「ウェブキャットプラス」「新書マップ」「ブックタウンジンぼう」「文化遺産オンライン」などの情報サービスを次々と立ち上げて、これらの「水源」に「連想機能」を持たせてきた。新聞記事などを丸ごと質問文として与えると、瞬時に関連文書が連想検索され、関連語が抽出される。これは、そのコンテンツに精通している人に記事を読ませて、その人の思いついた関連文書や頭に浮かんだ言葉が返される気分である。そのコンテンツからの「見え」が返されるともいえる。

複数の情報源からの「見え」を組み合わせることに、私たちは電子情報空間の中での自分の位置を知り、どの方向に歩き出すべきか判断できる。このコンセプトに基づいて、我々は「想・I M A G I N E」をデザインした (<http://imagine.bookmap.info/>) 写真。

多様で深みのある信頼度の高い情報源を複数横に並べて、ユーザーがそこに自分の想いを文章として投げかけると、各情報源ならではの情報の見え(文脈)が返される。それらを書棚のように並べて一覧することで、さらに多角的な文脈、情報の景色が得られる。ユーザーは各情報源の想いを読み解きながら歩き回り、その中から心に響く情報を取り上げて読み進む。その過程でユーザーの想いは少しずつ変化し、それに呼応して情報源が示す情報の景色も変わる。想いが連なり連想に変わる。

知識や真実の価値を信じた先人たちの深い想いを、今ここに生きる私たちの切実な課題や思考と響き合わせて柔らかく接続できればと願っている。



たかの・あきひこ 56年生まれ。日立製作所基礎研究所の主任研究員などを経て01年から現職。02年から東京大大学院情報理工学系研究科教授を併任。